

古典落語 第壹卷

古典落語

第三卷

飯島友治編
筑摩書房版

古典落語
第三卷

昭和四十三年七月二十五日初版第一刷発行
昭和四十九年二月二十日初版第八刷発行

編者 飯島友治 いじまともはる

発行者 井上達三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五二(代表)
郵便番号一〇一―九一
振替東京四一二三

印刷所 多田印刷

製本所 矢島製本

函デザイン・落合 茂

(分類) 0376 (製品) 17103 (出版社) 4604

まえがき

編 者

江戸後期から明治時代にかけて庶民の中で育てられ、その鍊磨された見事な話芸により万人に愛好されてきた古典落語は、昨今大きく変貌しようとしている。それは戦後の急激な時代の荒波によって古典落語の社会的基盤が失われると共に、演者の多くが聴衆の嗜好に左右されて、落語本来の笑いが次第に軽薄な爆笑に置き換えられてきたためである。

そこで、本格的な古典落語のもつ、地味にして重厚な、可笑しみと郷愁を誘う味わいを保存すべく、ここに現存の大幹部と故人四師匠が磨きあげた約八十篇を編集する次第である。

古典落語は、江戸言葉は無論、当時の庶民の風俗、習慣、思考等の史料を豊富に保存しており、これを記録しておくことは有意義であると考える。ただ、落語の真価は、腕達者の師匠の所演をじかに鑑賞することによって得られるもので、これを活字にすることは不可能に近いが、本書では、落語の陰翳を伝えるべく、各師匠特有の言い廻し、口癖等の微細な特徴もとらえ、各所にト書を入れた。また、内容理解の一助として解説・解題及び語釈をつけた。解題については繁簡の調和に欠けるとの批判もあるが、これは形式的な一貫性よりも全古典落語の内容の理解に重点をおいたためである。

終りに、本書が出来るまでには多くの人々の援助を受けたが、特に圓生師を初め各師匠方のご援助を戴いた。また編纂については延広真治・小川峯司・伊倉一孝・石川喜よ志・関三喜夫・駒田和子・丸山茂・原田真知子の諸君の多大なご協力を戴いた。ここに厚く謝意を表する次第である。

凡 例

一、江戸語の発音・抑揚などを、なるべく忠実に再現するために、適宜仮名の使い分けを行ない、特に片仮名の半音を用いた。

〔例〕「それッそうだ」「俺ァ」「どこィ行くんだ」「とうふウウい」「エエお笑いを」「なんでエ」「間鴨オや
りませんか」「俺ンとこ」等

二、音写したとき意味のとりにくい言葉には漢字を用い、また適宜あて字を用いた。

〔例〕ノ^ン本^ト当^トに・若^{ワカシ}年^シ寄^ヨ・お葬^{オウザウ}式^{シキ}・吉^{キチ}原^ハ・花^{ハナ}魁^{ケイ}・情^{セイ}人^{ニン}・相^{サイ}手^テ・日^{ニッ}本^{ポン}堤^{ツツ}・お殿^{オン}様^{サマ}等

三、漢字と仮名を、その意味内容に従って、適宜使い分けた。

〔例〕餅^{もち}を一つやろうか
酒^{さけ}を一杯だけ飲んだ
ひとつよろしく願います
人がいっぱい集まった

四、古典落語においては間のとり方が重要とされるが、それを間の程度に従って、「少し間」「間」と「……」を使い分けた。なお、言葉の省略の場合も「……」を使った。

五、本文および解説の中で用いた記号の使い分けは次のごとくである。

「」 会話、引用など。〔〕 編者による補足、語注、注釈など。

『』 題名・出典・諺・和歌・川柳など。 〱 歌曲などを歌う場合。

（ ） 演者の仕草・ト書など。 ↓ 〱 「……参照」の略。

目次

御慶

柳家 小さん 七

付き馬

三遊亭 圓生 三

三人旅

柳家 小さん 五

人形買い

桂 三木助 五

火焰太鼓

古今亭 志ん生 五

たがや

桂 三木助 二

佃祭

三遊亭 金馬 二

船徳

桂 文楽 二

道灌

三遊亭 金馬 一

小言幸兵衛

三遊亭 小圓朝 一

蛙茶番

短命

粗忽の釘

首提灯

文七元結

富久

三遊亭 圓生 三三

柳家 小さん 三三

三遊亭 小圓朝 三三

林家 正藏 三三

三遊亭 圓生 三三

桂 文楽 三二

〔解説〕

江戸の生活(上) (飯島友治) 三九

古典落語 第三卷

御^{ぎよ}

慶^{けい}

柳
家
小
さ
ん

この噺は江戸時代から伝わり、はじめは『八五郎年始』という題で高座にかけられていたが、その後『富の八五郎』或いはそれをつづめて『富八』という呼び方も生まれた。なお、『御慶』という題名が広く用いられるようになったのは昭和からである。

現在、高座へ出される富の噺は『御慶』の他、『富久』あるいは『宿屋の富』『水屋の富』など、いろいろあるが、こうした噺が他の「大名物」「廓物」「裁き物」「与太郎物」「根問い物」などと異り、特に共感を持って身近に聞くことができるのは、賭け物に対する考えが、昔も今も、全く同じだからである。

たとえば、今の人が、ふとした気まぐれから宝籤を買ったり、あれこれと勝手な理屈を付けて、番号を選び好みする心理は、『御慶』の主人公と全く同じであると思うが、どうであろうか。

同じ富を題材にしても『富久』や『宿屋の富』では、富に当たるまでの心理状態が噺の骨子となっているが、『水屋の富』やこの『御慶』においては、当たった後のことが噺の中心にされている。『水屋の富』においては、思わぬ大金を獲得して、いかにそれを守るか日夜懊惱するさまが描写されるが、庶民が夢とし、あこがれている大金を、実際手もとに持った時のアイロニーとして大変興味深い。一方『御慶』においては、もし大金を獲得したらという時の気持を、噺の中で八五郎が着々と実行してくれるわけである。実に富に対しては、当たる前ばかりでなく、当たった後のことまでも庶民の夢として、関心の的となる。

小さん師は二ツ目の小きん時代、師匠であった四代目小さんの絶品といわれた『御慶』を聞き覚え、そのままの型で二ツ目時代から演っていたが、その後、諸所に手を加えて現在のものとした。たとえば、八五郎が「御慶」「永日」を大屋から習う件は、江戸時代からの演出では「もちろん、四代目小さんの演出でも」、富が当たったその日に、家賃を払いにやって教わるが、小さん師は袴を着て年始に行つて教わるほうがおもしろみがあると改めた。また、八百両を貰い、しまい込む場面でも、四代目は股引を脱いで、その中へ入れて帰るように演っていたけれども、小さん師は着物の袖や懷や背中のはうへ入れて、それをかかえるような滑稽な仕草におき替えている。

富嶽が盛んだったのは、水野忠邦の行なった天保の改革で富の禁令の出る以前のことである。当時、三大富として湯島天神・谷中の感応寺・目黒不動が有名であった。特に湯島天神は地の便もよく、盛んで、大きい富が行なわれた。なお、落語の場合の富は、たいいてい一分で千両が当たることになっているが、実際においてこのような高額の富は珍しく、百両富、二百両富、三百両富、多くても五百両富が普通であった。噺の中のことなので客を満足させるためにも誇張されたのであろう。

落語の富は、大抵「来年の二月の末にお取りになると、エエこれ千両まる取りということになります……」「ただ今お持ちになりますてえと二割引けますでございませうが……」とあるが、実際においては、即座に金を受け取る場合、三割近く引かれるのが慣わしであった。これは、一部の大商人が富の主権者となつて行なつたが、場所を提供した神社へ場所代として奉納金を払い「富を行なう場合、神社の修理・増築などの資金調達という名目で許された」、神社奉行配下の同心の接待費や金一封、宣伝費、さらに主催者の利益などを考慮すると、およそそのぐらゐの費用がかかり、その分を差し引いて与えたわけである。なお、二月末、時には三月末になれば、全額支払うというのは、主催者がその金を他へ貸して、その利息で右の費用をまかなつたからであり、主催者が損をするわけではなかつた。但し、三月に貰うにしても、寄付金祝儀の名目で一割以上は差し引かれたのである。

聞き所は、女房の絆纏を質に入れて富嶽を買い入れるところから、俄大尽になつて元日を待ちかねる八五郎と女房の会話、一夜明けた元日の情景描写の場面である。なお、この噺は、内容の性質上、暮か正月だけしか高座へは出ないし、また、小さん師の他に大真打で演る落語家はいない。

サゲは、以前は「御慶ツ」を「何処へ」と聞き違え、「御慶てエのだ」とさらに一つ押し、「初卯の帰りよ」とサゲていた。すつきりとして、初春の噺にふさわしいサゲであつたが、「初卯」という言葉が一般になじまがなくなつたので、師匠は「恵方詣りに行つたんだ」と変えている。もつとも、「恵方詣り」も今の人には耳遠い言葉になつてきているけれども、サゲとしては合理的である。サゲは「途端落」。

長者番付 落語ではよく「千兩分限」とか「千兩あれば長者番付にのる」というが、それは江戸時代もごく初期のことである。中期以後の場合は、もちろん大金には違いないが、それは単に言葉の綾として使われたのである。特に落語に関係の深い後期ともなれば、収入の多い湯屋とか、大屋の株でさえ千兩近くのものにはざらにあった。

寺社奉行 江戸時代の神社・仏閣とその境内の取締りは、寺社奉行〔禄高の低い大名が任命された〕の手で行なわれた。したがって、寺社主催の富籤は、寺社奉行配下の同心が監視のために羽織袴姿で立ち会った。但し、この役も仕事をするために来たのではなく、酒食を饗応されたりえ多額の金一封が貰えたので、喜んで出張して来たのである。

切餅 一分(四分ノ一兩)の分判百枚、金二十五兩を紙で長方形に包んだもの。その形が切った餅に似ているところから名づけられたが、後にはそれにあやかって餅をその大きさに切るようになった。一分判の大きさと目方は金の品位と時代で異なる。例えば文政一分判が約三・三グラム(金五六%)、安政一分判二・二五グラム、天保一分判(純銀)八・六グラム。したがって八百兩の目方は文政分判なら約一〇キログラム。天保一分判なら約二一八キログラムである。

封印 小判・分判とも、保存・取引用には両替店などで一包ごとに、品質と金高を保証するために封印をした。

税 本来、税(うだちの誂)とは、屋根の棟を支えるため梁上に立てる束である。ゆえに「税が上がらない」とは自家を建てることのできないの意。転じて、貧乏している、成功しない。

珊瑚珠 江戸後期、女性の髪飾りは櫛・簪・簪の三ツ道具であり、特に、簪は金製、珊瑚の三分珠(直径〇・九センチ)、若向きは五分珠にあこがれた。なお、古渡り〔江戸の初期前後の輸入品の意〕珊瑚ともなれば非常に高価であった。

甘酒屋 市ヶ谷田町〔現、新見付近〕の堀端にあった江戸で一番大きな古着屋。江戸時代も後期になると、勤めを持たない御家人や各藩の下級侍、中間・小者たち、或いは下層の町人は生活に追われて、衣類の新調のできない連中が多かった。一方、幕臣・大名の家臣の一部には、毎年夏冬に、時服の拝領があり、また商家でも、従業員・出入りの者は四季施を貰い、古いのを売るため、市内には、それらの連中を相手にする古着屋が各所にあり、特に両国近くの富沢町、芝の日陰町、神田の柳原などでは軒を並べていた。

昔、富籤^{とみせん}というものが盛んでございまして、ただいまの宝籤^{たからせん}のようなものでございしますが、富の札の価^{いち}が一枚^{いちまい}一分^{いちぶ}という……そのころの一分でえと、ちよいと大金でございします。

それが大富^{おほどみ}、千両富に当たるとえと、これはまた、そのころの千両あれば長者番付へのるぐらいです。で、この、夢中^{むちゆう}になったためにいくらか身代^{しんだい}をつぶしたなんてえものがございました。当たりヤアこりや大變でございしますが、なかなか当たるもんじヤアありません。そのころの川柳に、
富籤^{とみせん}の引きさいてある首縊^{くびく}り……

なんてえのがございします。これはこの、当たらないてえと、一分損したんでなく、もう買った時から千両当たったような心持でいるんですから、千両すっちゃったような氣持^{きもち}なりまして、あゝ情けねえ……なんてんでな、首を縊^くったなんて、いくらかそういう悲劇があるようでございしますが……ですからこのころは、また、それがために家の中がうまいかない、夫婦喧嘩も絶えないなんてえのがいく

ちもございまして……。

「(下手へ)冗談じゃないよ、この人ア。しっかりおしよ本^{ほん}当に、幾日^{いくち}だと思^{おも}っているんだよ、今日は。暮^{くれ}の二十八日だよ、おかちん[餅]一と切^きないじヤアないか、のんきなこと言^いってちゃ困^くンね。台所へ行^いつてごらん、米櫃^{こめぶ}ごらんよ、米が切れて、醬油も切れてら、味噌も切れてら、塩も切れてら」

「(上手へ)よく切れやがったな、何か切れねえものがあるだろう」

「菜^{さい}ッ切り庖丁^{ほうちよう}が切れねえやい」

「なに言^いつてやんでコン畜生^{ちゆうせい}ア、そんなものア切れたほうがいいんだい。だからよ、いま言^いうとおり俺^{おれ}アいい夢を見^みたんだからよ、今度^{こんど}ア間違^{まちが}えねえからよ、なんとか都合^{ごうご}してくれ」

「なに言^いつてんだよ、一文だつて都合^{ごうご}できるもんかい。『富だ富だ』『こういう夢みた、あゝいう夢みた』何を言^いつてるんだい馬鹿馬鹿しい、そんなに富^{とみ}がよかつたら富と一緒に^{いっしょに}なつたらいいだろう、え? 離縁^{りえん}しとくれ、お前^{まへ}となんか一緒にいたらこの先、案^{あん}じられらあ、離縁^{りえん}おしッ」

「(頼み込むように)くだらねえこと言うな……てんだよ、え？だから今度(こんど)ア間違えねえ。いい夢なんだからよ、なんとかしろ、なんとか」

「なんともならないよ」

「ウウ……畜生、ウウ、本当に……おいおいおい、こうしよう、おめえの半纏(はんてん)脱げ、それで俺ア質屋に談じこんで俺ア一分拵(ちしこ)ってるから」

「なに言ってるんだい、こんな半纏で一分貸すもんかい」

「いいよ、俺ア頼むからよ」

「駄目だつてんだよ、おッ母さんの形身(かたみ)だよ」

「おッ母さんの形身だつてお前(まえ)のもんじゃねえか、なア、女房の物は亭主の物、亭主の物は亭主の物じゃねえか」

「じゃ、あたしの物ないじゃアないか」

「ぐずぐず言うことアねえてんだよ。いいからそれ脱ぎねえな」

「駄目だつてのに」

「コン畜生、脱がねえと張り倒すぞ」

おかみさんの厭がるやつを無理に引っぱがすと、こいつを持って質屋へ……とても一分は貸せませんでえやつを無理に拝み倒して、一分の金を拵(ちしこ)えるてえと湯島の札場(ふだば) (湯島天神)

前(まえ)の窟(くつ) 札売場(さかひば) へと跳んで参りまして……。

「(勢い込んで)おッ、すまねえ、一枚貰いてんだ」

「え、いらっしゃいまし、エエどういう…… (帳面〓手拭をひらいて左手に持ち) 番号にお好みが……」

「大ありなんだよ、お前。実はいい夢エ見ちゃったんだ俺ア、正夢(ただゆめ)ツてのかなア、鶴が梯子(はしこ)の天辺(てんぺん)へとまっつてずういと(両手の掌を下へ左右にのぼし)こう羽根を拡げてるんだ、

いま思い出したって目にあり浮かぶんだよ、鶴は千年てえから鶴の千と留めてね、梯子だから八百四拾五番、なあ、鶴の千八百四拾五番、こいつをひとつ貰(もら)えてえなア」

「あゝ、さようでございますか、よろしゅうございます。お待ちくださいませ……このところ湯島もよろしゅうござ

いますんで(前へ帳面を置いて、しばしば右の親指をなめながら札をめくり)確かにあるとはお請け合(ご)いできませんが、ただいま調べますでございますから……エ……あゝ、これはど

うも……うっかりしておりました、たった今でございますたか、その番号を買ってお帰(かへ)りになった方がございます」

「(せき込んで)えッ、おいおい冗談(冗談)じゃねえぜ……おい。その番号買ったの？ だれが？ ……おい、そりゃ俺が買う

番号じゃないか」

「へへへへ、貴方が買うとおっしゃいまして、別に前もってお話があったわけではございませんから、手前のほうでは買いに来れば売ります」

「買いに来れば売りますって、おい、冗談じゃねえぜ、それが千両になるんじゃないか、よ、おい……じゃその買った野郎どっち行つたの？」

「さあ、どっち行つたかわかりませんな」

「わかりませんか？ 情けねえことになっちゃったな、本当になア、おおい、なんとかなんねえかな……じゃ、もし千両富に当たったら、その野郎と俺と半分ずつにするってえなあ……」

「いやそういうことはできませんア、そりゃアまた、その方にご相談なさるんですなア」

「ご相談なさるッたつて、情けねえなア本当になア、一と足違いかい、ウウ畜生、本当に（間、考へて）すまねえけど同じ番号もう一枚拵えてもらおうじゃねえかい」

「そういう馬鹿なことはできません」

「畜生、本当に……あゝ情けねえ、畜生、うちの嬢アのやつ早く脱ぎゃアがりゃアいいし……また、質屋の番頭がそう

だい、『とても貸せません』、早く貸しやアこんなこと無んじゃないか畜生……嬢アが五百両、質屋の番頭が五百両、畜生め……千両泥坊め、畜生、えゝ情けねえなア」

「あゝ、どうも残念でしたなア。いえ、袖が残つておりますが、いかがでございます、袖をお買いになつては……」

「畜生、袖なんか買つたつて当たるわけねえじゃねえか、いらねえや畜生（腕組み、うなだれて）あゝ情けねえ情けねえ、俺ア人間やめなくなつちやつたなア俺ア……一と足違えか、運の無えッてなあ仕様のねえもんだなア……あゝ死んじまおうかしら、川へ飛びこんで……この寒さに川へ飛びこみゃアなア風邪エひいちゃうだらうしなア、あア、首を縊るなア外見ア悪いし……どうも、あゝ情けねえ情けねえ」

「（下手へ）あゝこれこれこれ、そこイ行く方、どうだな、診て進ぜようか、心配ごとがあるようだな」

「えゝ？ あゝなんだ、易の先生か。易なんぞみてもらつたつて仕様がねえけれどもなア、なア先生、ちよいとじやアみてもれえてえけどもね」

「あ、何を見るな、（すらすらと）縁談・金談・失物・失踪

人……」

「おオウ、そんなんじゃないやねえんだ、俺アねエ実はいい夢を見たんだけどな」

「あゝ夢判断か、いや、それはわしの得意とするところだ。よいよい、さあ、黙っておいで、黙っておいで、エエしゃべらないでいい」

「じゃなにかい、黙ってて俺の見た夢がわかんのかい」

「ま、一応はしゃべりな、あとは黙っておいで」

「じゃ当り前じゃねえか、実はねエこの梯子の天辺へねエ鶴がとまってから、すウツと（両手を伸ばして羽根の形）羽根を拡げてるんだ、えゝ？ いい夢じゃねえか、お前。鶴は千年生きてるてエから鶴の千と留めてね、梯子だから八百四拾五番ッ、この番号を買やあお前、千両富に当たるじゃねえか、なアおい先生」

「ああ、何かと思つたら富に凝つてなさるな、うん、あゝおよしおよし、富なんてえものアこりやア当たるもんじゃアない、それは非望の欲というもんだ。一分で千両当てようというのがこりやア図々しいなア、ありやア当たるもんじゃない。あたしが請け合う、やめなさい」

「何を言つてヤンでえこの野郎、つまらねえことを請け合

うない畜生、俺ア一と足違えで……その番号買われちまったじゃねえか、千両当たるところを畜生本当に……なんとかしろオ」

「涙ぐんでるじゃないか、よほど思い詰めて……まアよろしい、みて進ぜよう。あゝなるほど、鶴は千年で千と留めて、梯子だから八百四拾五番か、なるほどこれは素人の考えそうなことだなア」

「何？ 素人も玄人もあるかい」

「いや、じゃアお前さんに聞くが、梯子というものはな、昇るに必要なものか、また降りるに必要なものか、ご存じか」

「つまらねえこと言うない、昇ったり降りたりするから梯子じゃねえか」

「では聞くが、貴方が仮に二階に居るとする」

「俺ンとは平屋だ、二階は無えや」

「いや、なくてもいい、仮に居るとする。下に急の用事ができて降りるときに下から梯子を取られたらどうするか」

「なに言つてヤンでえ、こっちは身の軽いところで、ひよいッと跳び降りらあな」